

観察記録

## タンチョウ野外調査（第19回）結果報告 — 蒜山三木ヶ原雪上行動調査 —

岡山県自然保護センター 井口 萬喜男  
岡山県自然保護センター 坪井 稔  
岡山県自然保護センター 木下 彰二\*  
岡山県自然保護センター 武本 真実  
岡山後樂園 藤原 康正  
きびじつるの里 井口 順司

### Results of the 19th Study on the Behavior of Captive Japanese Cranes in Hiruzen Area

Makio INOKUCHI, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*  
Minoru TSUBOI, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*  
Shoji KINOSHITA, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*  
Mami TAKEMOTO, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*  
Yasumasa FUJIWARA, *Okayama Korakuen Garden*  
and  
Junji INOKUCHI, *Kibijitsurunosato*

キーワード：囀, 行動調査, タンチョウ.

#### はじめに

2002年に岡山県が作成した「岡山県におけるタンチョウ将来構想」の中で県北地域でも野外飼育を行うことを目標としている。しかし、これまでに雪上での野外行動調査実績がなく、今後の調査を行うにおいて、雪上での飼育データを得るために短期間の調査を冬季の蒜山地域で行った。

調査個体の10羽は2003年と2004年に人工孵化した個体である。この10個体は高梁川の野外行動調査地で行動を共にしていたグループである。10羽の飛行範囲は広く、高梁川の調査地から約27km離れた広島県神辺町にまで行動範囲を広げ

たこともある。

しかし、今回は調査期間が短いことや調査地が鳥取県との県境に位置し行動範囲を広げた場合、位置の把握に手間取る可能性が高いため、全ての個体を仮ケージの外に出さずに数羽をケージ内に残し、徐々に外に出す個体を増やしていく手法で行動を観察した。ケージの中に残した個体は行動を制限する役割を担っていたことから文中では囀という表現で統一した。

#### 調査対象と調査地の状況

##### 1. 調査場所

真庭市…(財)中国四国酪農大学校第二牧場内  
標高 539m

調査期間 2005年2月5日～2月11日

\* 連絡先: FJP63192@nifty.com

調査地の状況

タンチョウが調査地に到着した時の状況は第二牧場内で積雪約65cm、雪上は人間でも歩行可能であった。体重65kgの研究員が歩いて約13cm沈む。タンチョウが雪上を歩行するのに問題はない。牛の放牧地のため有刺鉄線を止めている支柱のほとんどが雪上に約50cm出ている。「休暇村蒜山高原」の前はソリ遊びなどのゲレンデとして開放されており、週末には200~300人のレジャー客で賑わっていた。

牧場内には2本の小川が流れ込んでおり中央付近で合流して南方向に流れていっている。形状は深さ幅共に2~2.5mで下部の幅が少し広がっている。底には幅約1m、深さ約10~15cmに水が流れている。川底に石が多く見られるがタンチョウの歩行を妨げるほどのものではない。しかし、川底までの傾斜がほぼ垂直であるため現状のままではタンチョウが中に入って水飲みや索餌をするのは難しいと考えられる。2月9日には小川の近くまで近づいているが川の中には入っていない。結局、調査期間中は小川に入らなかった。



写真1. ホテルから見たケージ周辺 (2005.2.6)



写真2. 牧場内の小川 (2005.2.7)



図1. 調査地位置図

2. 対象タンチョウ

- 岡-68♀ (2003年生) 亜成鳥
- 岡-69♀ (2003年生) 亜成鳥
- 岡-70♂ (2003年生) 亜成鳥
- 岡-71♀ (2003年生) 亜成鳥
- 岡-72♀ (2004年生) 幼鳥
- 岡-73♀ (2004年生) 幼鳥
- 岡-74♀ (2004年生) 幼鳥
- 岡-75♀ (2004年生) 幼鳥
- 岡-76♂ (2004年生) 幼鳥

3. 仮ケージについて

第二牧場内の堆肥舎を利用し仮ケージを設置した。この舎は第二牧場施設の最も南側にあり放牧場に隣接している。舎は144㎡の広さ(幅12m×奥行き12m)を2.7mの壁で二つに分け、床と壁面はコンクリートでできている。亜成長と幼鳥を分けて収容するために、それぞれの中に約5m四方の池を設置した。池は上のうを周囲に置き、ビニールシートをかぶせた。水深は約15cmに

して、水は24時間流し、凍結を防ぐようにした。土のうに被せたビニールシート部分は滑りやすいため、白布をかけたがタンチョウが怖がったため雪で覆って対処した。床部は全てコンクリートであったため、池の奥側は干草を敷いた。舎の表側(出入り口)は屋根から3m出したところに柱を立て、自然保護センターで使用しているネットを張り、ケージを延長した。これは、昼間外に出した個体が閉鎖的なケージにも入り易くした処置である。



写真3. 仮ケージ (2005.2.6)



写真4. ケージ内に設置した池 (2005.2.6)

### 調査結果

ケージ内に個体を残すことで亜成鳥と幼鳥の行動範囲が限られた。

2月6日, 8:30 幼鳥個-72.73と亜成鳥の個-68.70をケージから出す。4羽はケージから約20mの範囲内から離れようとはしない。このときの個は幼鳥個-74♀, 75♀, 76♂, 亜成鳥個-69♀であった。



写真5. 写真奥が個体 (2005.2.7)

ケージ内の個体は入口近くのネットに体を擦り付けるようにしながら歩き、外の個体を呼ぶ。外の亜成鳥は個体の声を気にしてケージの側から離れようとしなない。余りにも行動範囲が狭いため亜成鳥全てをケージに収容し、幼鳥を5羽全て外に出した。幼鳥は研究員についてケージから南へ約100m離れた。しかし亜成鳥が幼鳥に声をかける気配は見られなかった。幼鳥5羽がケージから南へ約400m離れた休暇村蒜山高原の建物辺りまで飛行し、旋回する。北には、ケージ裏の酪農大学校施設上空辺りまで飛行。

2月7日, 8:30 幼鳥3羽, 亜成鳥3羽をケージの外に出し, 幼鳥個-75.76と亜成鳥の個-69を個としてケージ内に残す。3個体がケージ内にいると外に出ている6羽の行動範囲が限定されたので, ケージ内の幼鳥2羽も8:50に外に出す。これで幼鳥の個はいない。約15分後, ケージから南へ約50m離れた地点から北方向に向かって飛び立つ。ケージの横にさしかかった頃から亜成鳥は幼鳥に何度も鳴き, 呼ぶ。幼鳥も亜成鳥に応えながらケージから北に約1km離れたキャンプ場に降りた。その後, キャンプ場周辺で遊んでいたが約30分後にはケージから南へ約1,000m離れた遊園地上空を旋回し, ケージの前に帰ってきた。

2月8日8:30に亜成鳥個-69を個とし, 8羽はケージ北へ約500mのところを旋回し, ケージ南の酪農大学校放牧地へ降りる。

8:56 個は亜成鳥個-69のみ。幼鳥5羽が飛び立つ, 続いて亜成鳥3羽がつづく, 8羽が飛行すると個の個-69が8羽に激しく鳴いて呼び続け, ホテル上空を飛んでいた8羽のうち亜成鳥3羽は幼鳥と別れて呼び続ける個(個-69)がいる

ケージに鳴き合いしながら帰ってきた。

13:15 重成鳥3羽の行方が判らなくなり、約1時間姿を確認できなかった。姿が確認できなくなったのは、ケージから南東へ約500~1,000mの場所で、そのあたりは谷間になっており、地上に降りていたと考えられる。この日は北へ約500m、南へ約2,000mの範囲を飛行した。

2月9日、この日は7~8回の飛行を観察した。飛行範囲は北へ約500m、南へ約2,000mであった。飛行コースは一定したように思われる。

2月11日、8:25に飛行。この時ケージから北へ約700m、南へ約2000mの範囲を約13分間飛行しつづけた。

この調査地では主に南へ向かって飛行範囲を広げていった。北へは山が近くにあり、大山からの吹き降ろしの風もあったせいかな、行こうとしなかった。また、ケージを中心に東西の範囲に関しては、2月8日の1件を除けば、ケージから約400m以内であった。南方向への飛行は、徐々に広範囲になっていき、調査地から南へ下りきったところは平野になっていたため、約2,000mの広い範囲での飛行が確認できた。

同調査地では気象条件が頻繁に変化し、風向きなどは10分後が予想できない状況であった。そのため、遠隔地への飛行を防ぐために、囿を使った調査を行なった。上記の記録全ては、囿となる個体がケージ内にいたため、ある程度は行動範囲が狭められているものと考えられる。

今回の調査で、囿を使った効果に対しては良い結果が得られたが、飛行範囲に関しては、正確な結果が得られなかった。しかし、安全管理の面で調査がやり易かった。今後は囿を使ったときと囿を使わない場合の調査が必要と考えられる。



写真6. 飛行の様子 (2005.2.9)

## 今後の課題

今回の調査では地元住民の反応なども知りたかったが、調査期間が7日間と短かったため、あまり知ることができなかった。

今回の調査は7日間と短期であったため、十分な調査を行うことができなかった部分もあるが、今後の長期間の調査に向けた飼育のノウハウは得ることができた。

北海道では冬期の間、給餌場に多くのタンチョウが集まる。この給餌場も今回の調査地と同じく一面が雪に覆われている。給餌場でのタンチョウたちは人間が与えたトウモロコシなどを食べて過ごしている。しかし、日中をずっと給餌場で過ごしているわけではなく、ねぐらや近くの川に行き、索餌などもして過ごしている。そのため、今回の調査地にもタンチョウが索餌をしたりすることができる川があれば、今後の調査を続けるにあたり魅力的な場所になると考えられる。

調査地の状況で述べた通り、牧場内の小川は両岸の形状や幅などから現時点ではタンチョウが好んで入っていく場所とは考えにくい。今後、長期の調査でタンチョウたちが川に入っていくようになるのか、または整備が必要なのか、なども今後の長期の調査で取り組んでいきたい。

## 謝辞

この調査をするにあたり、牧場の使用など様々なご協力をいただきました、(財)中国四国酪農大学校の皆様に感謝いたします。